

■研究・実践の課題（テーマ）

注視点検出装置「Gaze Finder」を用いた子どもの社会性の発達測定

■主任研究者 杉浦康夫

■共同研究者 片山泰一、土屋賢治

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

発達障害（自閉症関連障害 2～3%、注意欠陥・多動性障害 3～5%、学習障害 3～5%）の徴候・症状は一見すると軽微であるが、社会性の発達を大幅に遅らせ、母子関係の構築、友人関係の構築、集団生活への適応、社会生活の適応に大きな障害をもたらす。このため、可及的早期に教育的・治療的介入を行うことが重要であるが、介入の根拠となる早期診断・早期発見の手法に平準化された・確立された手法は存在しない。発達障害の早期診断・早期発見の科学的根拠としての「注視点分布の異常」に注目すると、発達障害児は発達早期に定型発達児と全く異なる注視点分布のパターンを示す（例えば、目の前にいるひとの目を見ない）。したがって、このパターンを、技術的に信頼度の高い機器を用いて測定することによって、臨床診断を補助する、もしくは診断・発見の客観的根拠として使えるのではないかという仮定のもと本研究を始めた。対象は 0-6 歳の発達障害児もしくはその疑いのある小児（子どものケアセンターのプログラム「ぺんぎん」「うさぎ」を利用する児）のうち、代諾者（おもに保護者）の同意の得られたものとする。子供ケアセンターで 5 月に 4 日、7 月 2 日、10 月 4 日、12 月に 2 日、1 月に 2 日測定を行った。得られたデータに基づきデータの安定性について検討するとともに、「支援」がデータ上・臨床的にどのような変化をもたらすかを知ることを目的にデータ収集をしました。

未発表であるが、たとえば、幾何学模様の動画を解析する場合には、個々の動画に対するデータそのものをみるよりも、他の 4 つのデータを合算したほうが、子どもの注視特性を「安定して」みることができるといった結果などを得てきました。

来年度も同様の方向で GF の活用をして、子ケアセンターに新たに 1 台の GF を購入し、さらに、GF・データ利用の主体を保育者グループに本格的に移行して、一般の利用に供して、GF の使い方・解釈の仕方のノウハウをお伝えることはもちろんのこと、「評価」と「支援」の接点となるものを形にしていこうための実践研究をする。